

## 論文審査の要旨及び担当者

### 論文題名

朋誠堂喜三二研究—黄表紙を中心に—

### 論文審査の要旨

本論文は、18世紀後半に活躍した戯作者の朋誠堂喜三二（1735—1813）が著述した黄表紙のうち、4作品を扱った4章にわたる論を主とし、小田原名物である薬のういろうに関連する文芸についての論を付論として掲げるものである。第1章から第4章の各章で取り上げたのは、『親敵討腹鞆』（安永6年〈1777〉刊）、『龍都四国噂』（安永9年刊）、『新建立忠臣蔵天道大福帳』（天明6年〈1786〉刊）、『文武二道万石通』（天明8年刊）である。

朋誠堂喜三二は、安永期から天明期にかけて30作あまりの黄表紙を執筆し、恋川春町と並んで黄表紙という分野の礎を築いた戯作者である。秋田藩江戸邸では刀番や留守居役として仕えながら、当時の幕政や遊廓の事情などにも通じていた。天明元年に刊行された江戸戯作評判記『菊寿草』の「作者の部」において、最高位に位置付けられており、当時の戯作壇における権威であったと言える。喜三二は寛政の改革を風刺した『文武二道万石通』を最後に黄表紙から手を引くことになるが、その作品は後代に活躍した山東京伝や式亭三馬、曲亭馬琴などの戯作者たちにも大きな刺激を与えた。古庄氏は、喜三二の黄表紙で取り上げられる趣向を分析することによって、黄表紙における笑いの本質を考えようとしており、そのことは18世紀後半以降の江戸の娯楽文芸に対する理解を深める上で意義あるものだと言える。

喜三二の作品は春町ほどの鋭さはないものの、既存の話が持つ面白味をよく理解し、細やかな気配りでもってそれらを取り入れながら、より高度な物語へと巧みに構成しなおしていくところに、技量が発揮されているとまとめられよう。そこで、古庄氏が着目したのは、作中の登場人物たちである。具体的には、「かちかち山」の兎、二代目市川八百蔵、天道、畠山重忠らがそれである。喜三二は、江戸以前の古典作品や芸能、神話、伝説、昔話などを踏まえながら、吹き寄せ、緋交ぜといった戯作特有の技法を用いつつ、人物を当世化させていく。しかも、そのような人物像を文章だけでなく、絵でも効果的に表現している。そこでは、喜三二の豊富な人生経験と武士として身に付けた教養によって、知的で奥行きのある登場人物たちになっているのである。古庄氏は、それら登場人物に注目し、それぞれの形成過程や背景、作中における役割に関する詳細な調査と緻密な分析を通して、各作品における喜三二の趣向について考察した。そのことによって、喜三二作品の登場人物に対して、いかに多くの既存の物語や人々の物事に対する認識、当時の出来事などが反映されていたかが明らかになった。そして、それら

を巧みにまとめ上げる喜三二の技量の高さも確認することができた。このことが、本論文の最も重要な価値である。

第1章『親敵討腹鞆』論—兎のキャラクターについて—。『親敵討腹鞆』は、「かちかち山」で成敗された狸の子どもが親の敵と兎を付け狙うという設定である。古庄氏は、子ども向けの絵本文芸赤本『兎大手柄』や黒本『かちかち山』、そして『親敵討腹鞆』に登場するそれぞれの兎について、性格的特徴と肉体的特徴の二つの観点から比較していく。その過程はじつに詳細で緻密である。性格面では、赤本、黒本の二作の方には正義感だけでなく、賢さや狡猾さがあり、それは「因幡の素兎」などの神話、『日本霊異記』や『今昔物語集』などの説話、「動物分配」系の昔話の他、兎の生態から生まれた「狡兎」という言葉や、兎の体色の白さによって影響を受けたものだという。だが、『親敵討腹鞆』の兎にはその賢さ、狡猾さが抜けており、代わりに「尻喰らへ観音」の言葉に由来する間抜けさや不信心といった頼りなさという要素が加えられているのである。一方で、狸や軽右衛門の孝道を立てるために自刃する、義理人情に厚い要素もある。この二つの要素は赤本や黒本の兎よりも不完全であり、それゆえに人間らしさを生むという。また本作では、腹切りという、本来は厳しく仁義をも感じさせる場面であっても、腹から鶉と鷺が飛び立つといった趣向—「うさぎ」が腹を切って「う」「さぎ」という鳥がそこから飛び立つという言葉遊び—を取り入れたことで、おかしみも生まれているのである。本来道徳的で心揺さぶられる場面も、それを擬人化した動物にやらせ、動物ならではの描写にすることで、諧謔的で滑稽な場面に塗り替えている。それは教訓的で真面目な昔話をどこまでユーモアにできるのかという喜三二の挑戦なのであったとの指摘は説得力がある。

肉体的特徴についても周到な分析がなされる。赤本『兎大手柄』の兎が筋骨隆々とした芝居絵風の姿で描かれるのは、そもそも兎が物語の中でも狸を倒す英雄的存在だからこそだとも言える。『親敵討腹鞆』の兎は主人公であり、義理堅く優しいキャラクターであるため、狸を倒すような強いイメージとしては描かれていない。頭部の描写は、『兎の大手柄』の野生の頭そのままから黒本『かちかち山』の鬚頭、そして『親敵討腹鞆』の黒い頭へ、という過程を見ると、ただの動物の「兎」から「兎の顔をした一人の登場人物」へと段階が上がっていく様相が見えてくるのである。

第2章『龍都四国噂』論—二代目市川八百蔵の役割について—。『龍都四国噂』においては、二代目市川八百蔵は、彼自身が登場するのではなく、あくまで亀が他人の空似であることと、猿になった佐治兵衛が扮することによって描かれる。しかしこの八百蔵は、童話「猿の生き胆」、謡曲「海士」などの既存の物語と接続しながら、本作に追善物らしさを付与しており、物語の構造上、重要な役割を担っている。

安永6年に病の為に43歳の若さで亡くなった二代目八百蔵は多くの人々からその死を惜しまれ、追善物の出版物も出回った。喜三二が、八百蔵の死の三年後に刊行する『龍都四国噂』の中に、物語の素材として二代目八百蔵を取り込んだことで、佐治兵衛の竜宮をめぐる一連の場面は、追善物における役者の地獄めぐり譚を読者に連想させる仕掛けを生み出したと読めるという。従来の追善物の型を取りつつ、地獄を竜宮に置き換えて物語を展開させる趣向が見えてくるのである。古庄氏は、作品の内的世界と外的世界がどのように融合していくかを丁寧に読み解いており、その点すぐれている。

また、平賀源内作『根南志具佐』（宝暦13年・明和6年刊）と『龍都四国噂』との間に、役者の死に纏わる物語展開や素材の類似性があることなどを見ると、『龍都四国噂』が『根南志具佐』の影響を受けているのは間違いないだろうという。源内に対する敬意が表れた喜三二の著作のうち、黄表紙の例は希少であり、本作はその一例として見てよい。そのように源内から喜三二への文学史的な道筋をつけていく着眼も非常によい。

第3章『天道大福帳』論一「天道」に関する考察一。天明期に関心が高まった天文学や心学の影響を受けた『新建立忠臣蔵天道大福帳』の「天道」は、日輪を擬人化したような強い印象を与える姿をしており、天の主宰者の立場の人物の代表格として後続する黄表紙に幾度も描かれた。黄表紙に登場する天の主宰者の呼び名には「天道」と「天帝」が多いが、古庄氏は24作品を取り上げて、それらにおける図像の関係を丁寧に比較しており、それによると、呼び名によって両者の絵の描写には異なる傾向が見られることがわかった。図像は主に、日輪型の頭に袍姿（A）、垂髪に袍姿（B）、唐土の皇帝風の装束姿（C）の三種に分類される。その中で、Aには「天道」の呼び名が、Bには「天帝」と「天道」両方の呼び名が、Cには「天帝」の呼び名が付けられる傾向にあるという。

また、AやBに見られる作中での呼び名の混同などから、天の主宰者の描き分けは初めから明確に認識されていたわけではなく、天界を描いた黄表紙が複数刊行された過程で次第に区別されていくようになったらしい。『天慶和句文』（天明4年刊）から『天道大福帳』、そして『心学早染艸』（寛政2年刊）に至るまでの変遷においては、喜三二と京伝が戯作者として互いに意識していた。それも踏まえつつ、古庄氏は、黄表紙に描かれる登場人物が常に発展しながら後続作品へと繋がっていく中で『天道大福帳』の「天道」像がいかに重要な位置を占めるものかを総合的に明らかにしており、価値が高い。

『天道大福帳』の「天道」は頭が日輪そのもので、顔から感情を読み取ることはできないが、それが伝統的な神の描き方に類似しているために、天の主宰者としての神秘性が備わっている。その一方で、人間的な仕草をさせているために、顔がないのにも関わらず表情豊かに見える。こうした神秘性と人間性とのギャップが「天道」にユーモアや愛らしさを与えており、人々を惹きつける登場人物となっているというまとめは、じつに魅力的である。

第4章『文武二道万石通』論一喜三二作品における畠山重忠像の変遷について一。寛政の改革を取り上げた『文武二道万石通』は喜三二の代表作であり、本作の主要登場人物である畠山重忠に松平定信を当て込んでいることはよく知られている。古庄氏は、喜三二作品における重忠像について『珍献立曾我』から『文武二道万石通』までを比較し、重忠の扱いにも変遷があることを明らかにした。近世文芸における重忠像は、知略に富み、現実的ではあっても、情け深く物分りのよい人物とされる。このようなイメージを構築したのが、中世より親しまれた曾我物や景清物の謡曲や幸若舞、そしてそこから発展した浄瑠璃や歌舞伎などの芸能であった。特に歌舞伎においては、18世紀初めに曾我物と景清物が結びつけられた狂言が上演されるようになり、黄表紙においてもその趣向が反映されていることがわかっている。また、重忠役で当たりを取った四代目松本幸四郎の似顔絵が黄表紙に取り入れられたこともすでに指摘されている。黄表紙における重忠の描写は景清物の「大仏供養」の件を取り上げることが多く、喜三二作品でも同様の傾向が見られるという。喜三二は黄表紙を手掛け始めてから幾度も重忠

を登場させ、前に取り上げた作品における重忠の活かし方を次の作品に応用させつつ様々な描き方をしてきた。古庄氏は、そのようにして構築されてきた重忠像の到達点を『景清百人一首』（天明2年刊）に見る。『景清百人一首』における重忠は、知性的で冷静な判断を以て景清を捕らえるという原拠の景清物のイメージを保ちつつ、景清の世界観をいかに当世風に置き替えるかが主眼になっているのである。そして、『文武二道万石通』では『景清百人一首』で一度完成された重忠を基礎にして、そこから更に松平定信という別の要素を加えたことによって、重忠という登場人物に新たなイメージを担わせたと古庄氏は指摘する。この点、的確である。重忠、四代目幸四郎、そして定信と三人も重ねて一人の人物像とする複雑な描写は、喜三二のこれまでの執筆過程での習練なくしては成しえなかったというまとめも納得できる。

付論「小田原名物いろいろと江戸文芸」。小田原の名物である丸菓のいろいろは、享保3年（1718）に二代目市川団十郎が「外郎売」を初演してから、文学、芸能、浮世絵によって広く受容されていった。全体的に見ると滑舌の改善について言及しているものが多いという分析も、豊富な資料を渉猟しつつ、妥当な結論に至ったものと言える。

どの論文においても、多量の情報を収集する手腕が発揮され、そのことが論の説得力を増やしめることにつながっている。さらにそれらを分析する鋭利さも備わる。そのことで、古庄氏の博士論文は高度な達成を示している。そのような結論を、試験担当者3名がさまざまな角度から質疑応答の口頭試問を行った結果、得た。

以上により、審査員は一致して古庄氏の博士号取得に賛意を表するものである。

論文審査主査 鈴木 健一 教授

中野 貴文 教授

藤澤 茜 非常勤講師

(神奈川大学 国際日本学部 日本文化学科 准教授)